《HUTAN》森の通信

ウータン

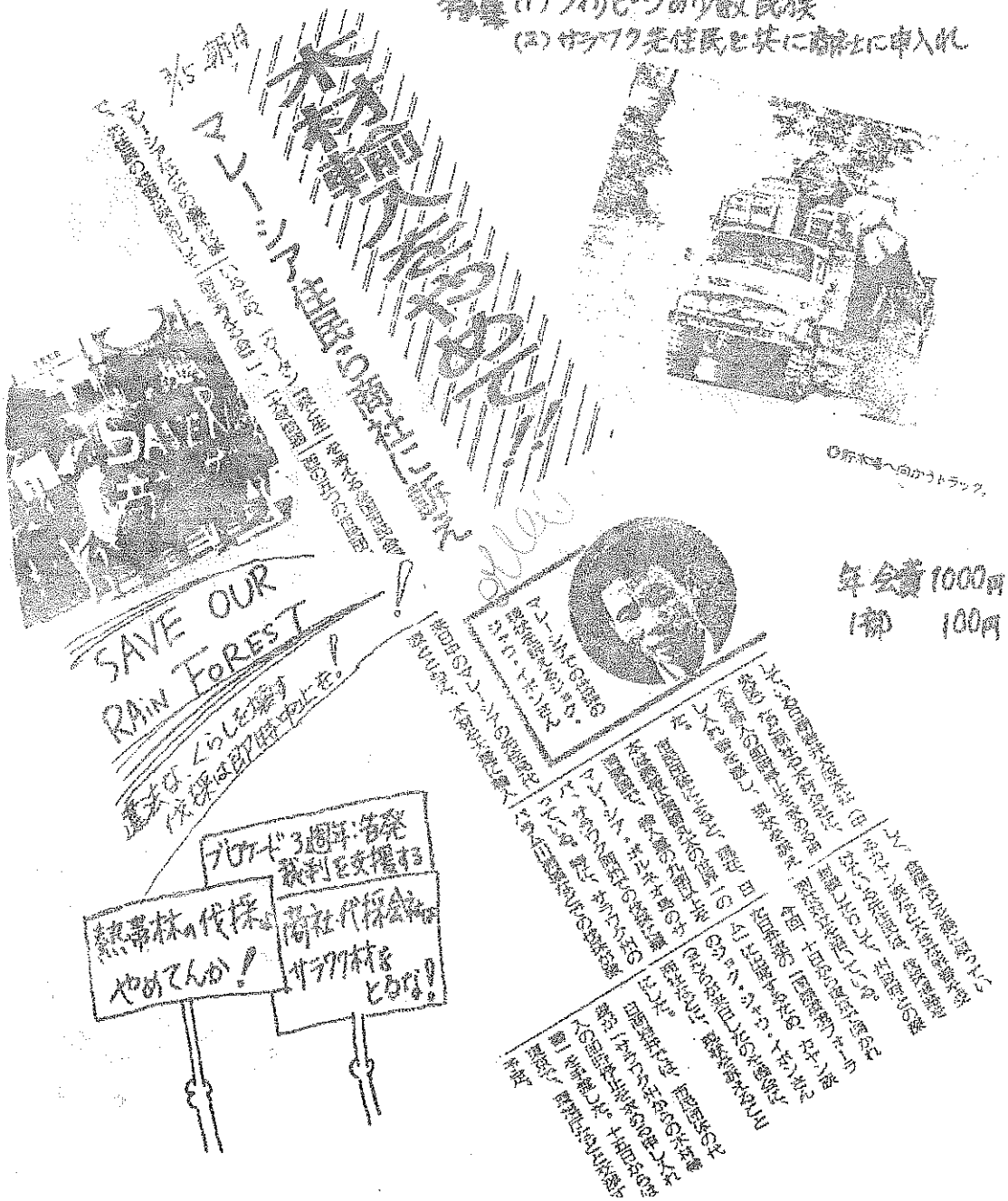
No.13 1990.4.3

ウータン・森と生活を考える会　　郵便振替　大阪3－3880

大阪市北区中崎西1－6－36　サクラビル新館308

「自然を返せ！関西市民連合」事務所気付　☎06－372－1561

特集（1）フィリピンの少数民族
（2）サラワク先住民と共に商社に申入れ



フィリピンの少数民族（Ⅱ）

〜バゴボとマノボの人びと〜

久保博興

僕が訪れたミンダナオ島には、ごく大ざっぱに言って三種類の宗教・文化グループがいます。主題としてとりあげる少数民族は、この地方に昔から暮らしていた人々です。基本的には原始宗教を維持しています。二番目のグループは、十五世紀に入ってきたイスラム教に同化した人達です。三番目がクリスチャン。彼らはオニ次世界大戦以降、北方のビサヤ諸島やルソン島から移住してきました。町中ではごく普通に、クリスチャンやモスリム（イスラム教徒）に出会えますが、少数民族の人々のくらしを知るには、彼らの集落まで舗装されていない山道を車で何時間もかけて訪れなければならず、一介の旅行者には容易なことではありません。共に短期間でしたが、バゴボとマノボという民族の、二つの集落を訪れる機会を得ました。

バゴボの人々を訪れるために、アポムの方面にやって来ました。元来、彼らはもっと北方の一帯で生活していたということです。現在、そこはダバオと呼ばれ、フィリピン有数の大都市となっているのです。彼らの家は竹でできていて、屋根はニッパ椰子・地方の家は、少数民族のものでなくても似たような様子です。風通しがよく、横になってみると実に快適です。

この集落は道路沿いにあり、クリスチャンの人たちの表現を借りるならっすでに開化されています。彼ら独特の民族衣装は「恥かしいもの」となり、伝統的な精霊信仰よりもキリスト教がよく行き渡り、ギターの音にのせた「聖歌の行進」なんかが、どこからともなく聞こえてきたりします。伝統文化が色濃く残っている場所もあるのですが、ゲリラ地域と重なってて治安が悪いそうで、残念ながらそこに近寄ることはできませんでした。Tシャツにジーンズ姿なんかのバゴボの人びとは、他のビサヤやルソン系の人との違いは特別見受けられません。ただ、移民社会を構成するクリスチャン・グループの彼らに認められるような解放感に比べれば、やや閉鎖的な印象を受けました。僕が日本人で、コミュニケーションは英語がほとんどになってしまうという事も随分マイナスになったようです。

そういうなかでも、〝珍しいヒト〟に様々なアプローチを試みるのは、素直で明るい子供たちです。カメラを向けると最初は泣きながら逃げ出してしまったリンという女の子とは、一番の仲良しになりました。それから、ダムパという輪ゴム遊びをしながらしきりに話し掛けてくる男の子。理解しかねている僕を見てまわりの大人が「イングリッシュ、イングリッシュ」するとその子は恥かしそうに笑って、「ビサヤ・ラン（ビサヤ語しか話せないよ）」。普段はバゴボの言葉で話している子供たちも、学校や町へ出て行けばダバオ地方の共通語であるビサヤ語を使い、小学校では国語のピリピノ語（タガログ語）と英語を習い始めます。

フィリピンでは、どこに行ってもたく

さんの子供に出会います。見事がらくな人なんて極く普通のことです。そして彼らはよく、親の手伝いをします。この集落の共同の水浴み場は谷をおりたところに泉が一つあるだけで、青き赤土の坂道を竹筒やプラスチックのケースを担いで往き来していく子供たちをよく見かけます。（ちなみにこの泉は共同の水浴び場でもあり、期は男女で賑わいます）マニラやセブのような大都市で、新聞やタバコを売ったり観光客相手に物乞いをしている子供とは違った、生き生きとした目をしているのは実に印象的でした。

増え続ける人口成様々な問題を抱えていることは確かです。しかし、それと同時に、この国の躍動的なエネルギーを強烈に投げ掛けているのも、この子供たちでしょう。

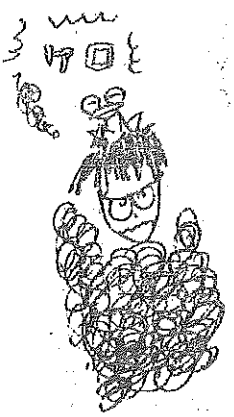
夜は電気のないこの集落はほんとうに暗くなります。こんな暗さと静けさは、もう日本には存在し得ないかも知れない。町中の、比較的便利な小ざっぱりした場所に宿をとりながらチョッと訪問するだけだったとしたらこうりったことまでは味わえなかったでしょう。明日の朝食にするカエルを捕りに行こうということになって、石油ランプの光を頼りに低地へ降りて行きました。新き水を利用した水田がひろがっていました。ここの人たちは稲作に専念しています。さて、裸足になって暗い中での捕獲です。僕も小さい時分にはよく蛙捕りをしたものの、フィリピンのカエルやナマズとはどうも相性がよくないらしい。魚目が効かないうえに足の裏はヒリヒリ。ここまでくると"文明人"である僕は、弱いもんだなあ」と思う。僕の収穫はカエル一匹。それにしてもここのカエルは小さくて数が少ない。この事について後で訊ねてみると、数年前から導入した化学肥料の影響だそうだ。

この集落を訪れる際、案内してくれたプロテスタント教会の友人は米を持ってきていた。お米をつくっているバゴボの人たちに、町でわざわざ買った米を寄付するのである。この辺りには、米や雑穀類の乾燥用地と精米機を備えた集荷場を持つ有力者がゾロゾロだ。稲作に従事する人々は不便な道のりを、薪を作って米をここまで運んで来る。小学生くらいの子も運搬を手伝っているようで、集荷近くではよく、裸馬に跨って帰ってゆく子供たちを見かけました。

そのような光景からすぐには気付かなかったことだが、山間に追いやられたバゴボの人びとでさえも、投資型の農業のなかで、自らが食べる米が奪われ、貴重なタンパク源のうち蛙つかも消えつつあるのである。

★マノボの人々

さて、次に、マノボと呼ばれる少数民族の集落のひとつを訪れました。彼らがこの一帯にやって来たのは一九六〇年代後半のことで、ビサヤ系の人々の入植の結果、山中に追りやられ、ここに落ち着くようになったということです。丁度この頃、更に大きな肥沃な平地に、アメリカと日本系列の農業産業が進出してバナナ園を獲得しています。この地に来るまで、彼らは裸に近い姿で生活していたといいます。もともとマノボの人びとは、移動生活をしながら焼畑や採取により暮らしていたようです。



ミンダナオ南コタバトのチボリ族

中尾章司

ミンダナオ島のほぼ南端に、ジェネラル・サントスという町がある。この町から南コタバト州の山間部にあるチボリの村をめざして、車で四時間の旅。山道をジプニー（フィリピンの乗り合いバス）で行く。

途中、ジェネラル・サントスの近くにはココナッツ林が続く。郊外へ出てしばらくすると、山の麓には、延々と続く辺り一面のパイナップル畑。これがドールの持ち畑。こんな田舎にも多国籍企業が土地を独占して、金のなる木のパイナップルやバナナを栽培している。果てしなく拡がるパイナップルの青さも壮観ではあるが、同時に複雑な気分にもさせられる。こんなに広い土地が多国籍企業に独占されて、この地方独自の産業発展はあるのだろうか。

チボリ族の生活するレークセブに八七年十月十日から一週間滞在した。

サンタクルス・ミッションの説明から始めよう。サンタクルス・ミッションがこのチボリ族のために働きだしたのは、もう二十年も前。この南コタバトで宣教活動および教育活動をイスラム民族を相手に広めていたアメリカ人の宣教師が、チボリ族にもその宣教を始めたのがそのきっかけ。サンタクルス・ミッションの責任を持つレックス神父は、もうこの土地に25年以上いて、チボリの人々と一緒に生活している。

このミッションのもとに多くの人々が働いている。二人の神父以外はすべてフィリピン人である。教育、農業技術、植林、機織り、真鍮細工、里親制度、無線、コミュニティー・スクールの建設などなどいろいろなプロジェクトを抱えている。現在、ミッションのスタッフは４００人を超える。うちチボリ族の人も７０人を超えるだろうという。その中心となっているのが、コミュニティーセンター・スクール（共同体学校）と呼ばれる各地域の小学校である。２７のコミュニティー・スクールがある。この学校の多くは、まだできて４、５年しかたっていない。南コタバトの近隣の地域からこの少数民族のために尽くしたいとの希望を持った若者たちが、おもに学校の先生として集まってきているのである。スタッフの多くは、大学を卒業して間もない、ほくとそんなに年の違わない若者たちである。

ぼくをあちこち連れて回ってくれたのが、ジョージ。彼は、日本人やアメリカ人の里親に送るチボリの子供の写真を撮ることを仕事にしている。子供の里親制度をもいて海外から資金的な援助を得ているのである。その里親の中でも日本人が一番多いというわけ。「チボリ国際里親の会」には、すでに二七五〇人の会員がいるらしい。

ジョージの行き先についていっては、そこの人々の生活ぶりを見たり、質問したり、ダツー（部族の指導者）に出逢ってインタビューした。

チボリの人々がすんでいる村落や田畑は山の斜面が多い。もともと狩猟採集民族であるから移住性の部族ではあるが、もとから山の上に住んでいたのではない。比較的、低地のほうで移住生活を営んでいたのが、他の土地から移住してきた低地民に土地を奪われ、追われる形で今の土地に住み着いたという。この南コタバトに限らず少数民族の多くが歩んで来た道である。このレークセブと呼ばれる一帯に部族民だけが住んでいるわけではない。低地民も住んでいる。あるスタッフによれば、人口の2割に過ぎない低地民が耕作に適した土地の大部分を所持しているという。

おもに、チボリの人々の収入源は、米や野菜の耕作、チナラクと呼ばれるアバカ（マニラ麻）から作った織物、真鍮細工などである。実際には、農作物は自分たちが食べる分にも満たないので換金はしない。多く取れるものといえば、カモテ（いもの一種）ぐらい。少数民族といえども、全く商業経済の影響を全く受けずに生きていけなくなっている。狩猟採集の生活が定住の生活に変わった以上、耕作しなければならない。耕作用の土地が十分にないので、それにかかわる、米を買う金をかせぐ方策が必要。ミッションが援助しているのがチナラク織りや真鍮細工、あるいはその他の工芸品作りである。それらの製品をミッションが買上げ、みやげものとして、マニラなどで直接、間接的に売っているのである。

腕環、ボロ（山刀）の持ち手、人形など真鍮細工。年配の男性は今でも腰に大きなボロと呼ばれるナイフ（山刀）をぶらさげて歩いている。ダツーは、そのボロの持ち手を細かいデザインの入った真鍮製にして、指導者の印にするのである。あるいは、腕環、首飾り、鈴のついた鋼に縫うもの、これらすべては部族の祭りの装束である。そういった伝統的なものが、今は土産物としてマニラの店先に並んでいる。

その真鍮細工の風景を見た。チナラックもそうだが、まさしく名人芸。まず、粘土とろうとで型を作る。それを火にくべると、ろうが溶けて空洞になり、粘土が焼けて型になる。ふいごで風を送って真鍮の材料を真っ赤になるまで溶かす。そして、真っ赤になった真鍮を粘土で作った型に流し込んで水で冷やせば、それでおしまい。後は型を割って、最後に細かい仕上げをするだけ。

とこう書いてしまえば何でもないが、これは一つの芸術である。大量生産で、生産の工程を知らずとも金だけ出せば何でも手に入る世代に育った自分にとっては、やはり人間の知恵を改めて知るようで眩しかった。

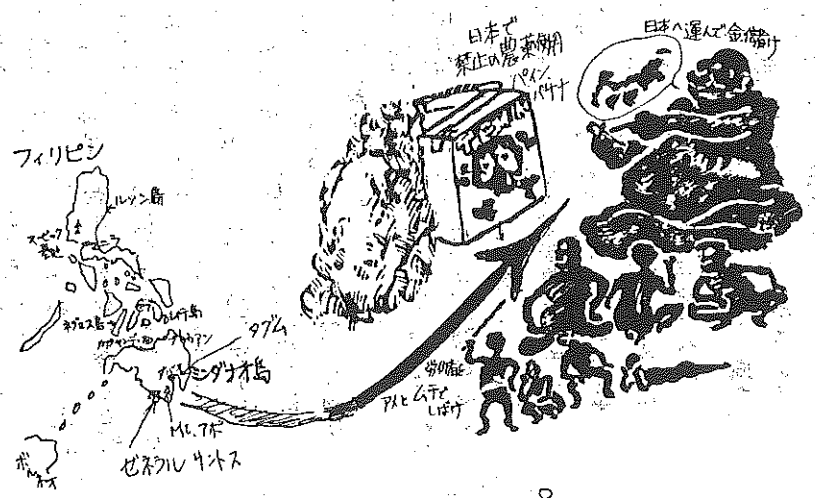
チボリ族のもともとの宗教は、アニミズム（精霊信仰の原始宗教）である。今は、ミッションの布教の結果、カソリック信者となっている。チボリ族の伝統的生活とカソリックの考え方とでは矛盾する部分があるとぼくは思い、どういう形でその矛盾をなくしているのか大いに興味を感じた。ミッションは、できるだけチボリ族の文化を尊重する形で信教を進めている。またカソリックの信教を強制することもない。

チボリ族は自分たちの言葉チボリ語を持つ。チボリ語の聖書も作られ、日曜日のミサもチボリ語で行われている。この点は、レックス神父を中心としたミッションの姿勢が表われている。

チボリ族は一夫多妻の部族である。ダツー・フィカンにも6人の妻がいる。一番目の妻がリーダーとなって、6人の妻たちがチナラック織りやコーヒー豆を乾す仕事、など家内産業を分担して行っていた。また、チボリ族では離婚が認められている。まさにカソリックの教えと対立する点であろう。チボリ族の文化を否定してしまうのではなくその独自性を尊重したうえで、宗教的な教えと教育を中心にさまざまな面からチボリ族に尽くそうとするミッションの姿勢がチボリの人々の信頼を得ている理由だと思う。

いくつもの言い伝えがある。何かの約束をするときに、約束する両者がラタンの棒を握って誓い合う。誓いを破ったものは即、命を失う。ラタンの精霊が見守っているから。レックス神父が始めてやってきたときに、やはり、このラタンの誓いの儀式を行ったという。このように、自然に精霊が宿り、その精霊との信頼関係を大切にするというのがチボリ族の元来の生き方のようだ。

年代の上の人々には、まだこのような伝統的な生活習慣や考え方が色濃く残っている。とはいえ、全くそのまま



であるわけではない。子供たちや若い世代にとっては、学校教育の影響もあって過去の話になりつつある。ルウェックと呼ばれる民族のスカートを女性に対し、できるだけはくよう、学校でも指導しているが、例えば、ボロ（山刀）を腰につけて歩けとは言わない。狩猟採集民族であったチボリの男性は、今でも多く腰にボロをぶらさげて歩いているのだが。

文化を大切にする部分と変わりつつある部分とが混じりあいながら、今のチボリの人々の生活があるのだ。実際に、一夫多妻の習慣も、教育を受けた人間を中心に少なくなりつつある。

チボリの人々ミッションが共に生活しているレークセブ一帯は緑の環境の多い、空気のきれいな土地だった。電気が十分になくても、水さえもいちい川に汲みに行く困難があっても、人々は前向きに生きている。気にかかったことは山に木が少ないこと。ミンダナオの原生林に木がないはずはない。焼き畑式の農業のためか、どこかの豊かな国に輸出するために切り倒したものか、はっきりしなかったが、ひどいところでは山崩れの被害も起こっている。自然と共に生きるからこそ、自然を大切に扱うべき例ともいえよう。植林のプロジェクトが、ただ今進行中。

たった一週間の滞在。食べ物がうまかった。野菜が豊富。山の上なのでそんなに暑くない。食欲も進む。よく食べ、よく歩き、よく寝た生活だ。近くの湖で取れるティラピアという魚がうまかった、湖へ出かけたときには、腹いっぱい食った。

チボリの言葉は結局、おはよう（ハヨラフス）、こんにちは（ハヨケーモ）くらいしか覚えなかったが、子供たちとはよく遊んだ。ラムラハックというコミュニティー・センターに行ったときには、休み時間に子供がダンスを踊ってくれた。一人の男の子が叩く太鼓に合わせて、二人の女の子がチボリの踊りを踊る。三人とも、小学校二年生だったが、とても可愛かった。あの瞳の輝きは忘れられない。

最後に一つ、問題だと思うこと。土着の民族ながら、十分に土地が持てていないことがチボリ族の一番大きな問題だ。低地民に追われ、山の奥深くに定住するようになった歴史。なぜ、山の中まで、低地民が少数民族を追わなければならなかったか。断言はできないが、多国籍企業の存在を無視してはならないと思う。平坦な一等地を米や穀物の生産の土地として使っているのではなく、パイナップルやバナナを海外に輸出し、あるいは、豊かな森林から木材を切り倒し輸出して、その儲けが多国籍企業の懐におさまる。この南コタバトの場合は、ドールだった。

現地の人々の自立（少数民族も低地民も含めて）という場合、そういった社会的背景、歴史的背景を見逃しては見誤るだろうと強く感じた旅だ。

貴重な資源　せっかくつくるなら
より内容の濃いものに。

新しいパンフレット作ってみませんか

（編集部）

度重なる伐採問題への抗議申入れ、デモ、集会の合間をぬって　着々とパンフレットづくりは　すすめられております。

さて、今回は、どのような構成で、どんなメンバーによって、作製されているのか　ご紹介いたします。といいますのも、せっかく、ない袖を振ってはるパンフレットですから、感想文集でなくてはなりませぬ。ある程度の体験、よそではなかなか手に入れれない情報の提供をねらっておりますゆえに、私ども編集委員にない経験をお持ちの、あなたのお力添えが　是非必要です。

"書くことは　ろまないけど、言うことはできる"人とか、"書くひまがないから、イニシアチブにはなれないこもいい"方とか、"よし、ここはおれの腕前か"とうでまくりしているとか、是非ワークショップの各セクション担当まで　連絡下さいませ。

又、パンフレットは　一部七百円の予定です。（予定）　メンバーで　買いとって　販売にあたるので、こころもち一人でも多くの方の　ご協力が必要となります。個人で、あるいは、所属していらっしゃるグループで、まとめ買いしていただける方　今なら、ご注文の部数の予定を　お知らせください。お早めに、お申し込みを――使って　気の大きいことは、いえないのが現実ですので、なにとぞ、よろしくお願いいたします。

原稿が　どういう形、全体の調整、及びサイズの決定といたしますか、さしあたり、次のような　大きさになる予定です。

〈サイズ〉
- A5版
- 一頁値　千字（字書き込む）
- 頁数は、約七〇ページ。（予定）

〈価格〉
- 七百円

〈お問いあわせ先〉
西岡良次氏
○七二二－五三－〇五〇五

〈内容〉

学習者 みなさまのご意見をおまちしております。

〈I〉私たちの暮らしと木材

担当 ― 井上、鈴木、豊原

〔現状〕

序：なぜ我々は再生と呼びかけるか。

① 近畿圏の行政のゴミ収集の方針

・大阪市・西宮市・宝塚市・豊中市・箕面市・茨木・神戸・堺・豊橋・吹田・摂津（予定）などの自治体で、分別収集の考え方、資源ゴミの処理、焼却・ゴミ予算市民への呼びかけはどうかなどインタビューして、表にする。

・右にあげた自治体のうち、とくにおもしろい働きをしている。

② 自治体・企業がとりくみ出している、古紙利用、生産、入手方法など。

③ 古紙について

・ごみあがるまでの過程、国内における古紙の割合、最近の動向面積。

・パルプ材、チップの輸入状況

④ コンクリートパネルのリサイクルについて

・コンクリートパネルのあめる割合と、そのリサイクルにかかわる問題点。

⑤ 生活に近い題材のんに触れてみよう、ためしてみよう。

・一ヶ月に集められたゴミを分別してみよう。（実行版）

・ゴミ回収・新聞回収のスペイニヲビュー。

・廃棄物法にメスを入れる。

⑥ わりばし

・工場見学 日下産材中。

⑦ ゴミ処理問題

〈II〉進む熱帯林の破壊と先住民の暮らし

・フィリピン・タイ・ブラジル・パプアニューギニア・サラワク（中尾・西岡・田中・大西・井上・鈴木）

〈III〉なぜ、熱帯林が壊されたか

① 日本の森林と丸太・合板の使われ方 ―歴史と現状―

② 熱帯林破壊の歴史

・木材輸出国から木材大消費国へ なぜ変わったか。

・戦中戦後から木材輸出、そしてアジアなどでの気候（西岡）

③ 開発は暮らしを壊す ―熱帯林伐採と経済侵略（西岡・奥谷・大西）

・開発と人権抑圧（ODAの使われ方や人権弾圧の諸事）

・フィリピン・インドネシア・アマゾン・サラワク・半島マレーシア・シンガポール

・ODAはなぜ企業に始ど還流するのか。（中尾）

〈IV〉熱帯林再生は可能か。（西岡）

〈V〉私たちはどうするのか。（数人で）

―以上―

初心者マークの会員のひとりごと

井下祥子

森に生きる人たちがいる。
樹と水と風と光の中で、虫やけもの、鳥と生き、自分の足でたつ人々。自ら採った、自ら植えたものを日々の糧にする人々。

伝統的な生き方、森と共に生きる中ではぐくまれた文化―私たちが学ぶべき知恵がそこにどれほどあるだろう―に誇りをもち、「土地を売りとばす」などという概念さえ持ったことのなかった人々。

「文明」の名のもとに、アフリカの、アメリカの先住民、そして〝アイヌ〟の土地を奪ってきたのは、銃の威力と背景にした「法」だった。文字を持たぬ人々の、土地に関する慣習法は、「先進国」の成文法（文字になった法律）に無視され、「登記」によって土地は〝合法的〟によそ者のものになった。

今、私たちは、「快適なくらし」のために、たかがティッシュや素適な包装紙のためにそれをくりかえそうとしているのではないか。銃のかわりにYENをちらつかせて。

その土地の風土と、先祖から永年かかってつくりあげてきた暮らし方と―それを一挙に奪われた人々は、飢え、失業、充実感のない、過酷な単純労働などにさらされるが、何より悪いのは、自分の魂―アイデンティティを失うことだろう。異文化の中でさげすまれる人間として、劣等感までしみこまされ、よりどころとする文化は失われている・・・。

――と、非常に大ざっぱな話を書いたが、消えゆく熱帯林の陰で、こういうドラマが再現されつつあるのでは？

巨大文明に接した多様な文化が、いやおうなしに消えさり、画一化するのは、仕方がないかもしれない。

が、本人たちが「ウシらはこの生き方でよろし。ハイテクなんかいりまへん」という時、「文明」を押しつける大きなお世話はやめにしたい。固有の文化を守りつつ、いかに世界の「進歩」と共存していけるかを共に考え、色々教わるべきだ―なんて偉そうなことを言う間に、バッサーッと熱帯林は切られていく。

さてどうするか。

翻訳するだけの「口先き女」ではアカン、と『ウータン』に顔を出しはじめたものの、実際現地へ行った人、色んなモンダイに取り組み続けてきた人の間で小さくなるばかりだ。（というのは真赤な嘘。十年前からいるようなデカイツラをしている）

気はもんでるが、実際どう動いていかわからない。内容充実、毎号お得な『ウータン』の会報を読みながら、私のように悩む読者も多いと思う。マレーシアは、少々遠い。

が、結局は我々のくらしを変えないと、どうしようもない。エゼを採りつくし、紙を浪費し、他国へ公害をまきちらし―をなんとかするには、我々の働き方、食べ方、ゴミの出し方、買い物の仕方、投票の仕方を変えるしかない。というわけで、「ゴミ」のことを調べている。成果はパンフレットの一部になる。

タイからの使り（6）

Kさん、週刊J・Jありがとうございました。今週は長崎市長狙撃事件と、アルメニアとアゼルバイジャンの抗争を主な狙いとした編集方針のようですね。

私はKさんとは違った感じで狙撃事件の詳しい経過を読みました。

日本のようにタイでは、溢れるような情報が得られること等は望めませんので、繰り返し繰り返し読んで行くと、天皇に戦争責任はあると市議会で本山市長が答弁し、右翼を標榜する暴力団体の一人が、発言撤回に応じない市長を、やむにやまれぬ義の心で、至近距離から発砲したとありました。

マスコミなどは言論の自由だけで問題としているが、天皇の在り方こそ論議されるべきだ派や、昭和天皇は昭和二十年九月マッカーサー司令官に、戦争責任は私一人にあると言われた、その御心に感謝をしている犯人を支持する派など、多済な記事に仕上げられていますが、そのテロリズムを生み出すに至った日本の社会の構造や、個々人が民主主義・経済大国に身を潜めて、積極的に政治闘争に参加しようとする意志の無い事への警鐘は、遂に見い出すことができませんでした。

もうひとつの、ソ連連邦の危機の特集もありましたが、記事のスペースとしては小さくても、週刊J・Jの編集意図が露骨に見えてくる、"多国籍民族の国際ネットワーク"に興味をもちました。

その記事の概括は『米軍がパナマに侵攻したという。侵攻の目的はパナマ運河の確保だろうという予想に反して、指導者のノリエガを逮捕しておきながら、パナマ国内のアメリカ人の安全を守るためだけという。それではパナマに住んでいたアメリカ人は人質だったのか。世界中に住んでいるアメリカ人はすべて侵攻が起きると、人質の立場でしかない。

中国人はアメリカ人を上廻る人口が世界中に住んでいる。あらゆるところに中国がある。多民族ならぬ多国籍民族名のだ。レッドチャイナだけで中国は理解できない。中国人が世界中に張りめぐらせたネットワークは、人的・経済的・文化的に強大な影響力を持つ。レッドチャイナは、中国人の国際ネットワークをコントロールできなかった。この中国人のネットワークを組織した知恵を大いに学ぶべきである。

日本ほど一民族と一国家が強固に結び付いた例はほかにないが、国際ネットワークをなると、将来にその不安を残す。』というのです。

このS記者は、世界中に散らばる華僑に、過大な評価を与える一方で、日本の一民族・一国家を強調しているのです。

日本には、朝鮮人・琉球人・アイヌ人ほかに中国人も勿論ですが、いろいろな民族がいます。世界で最大の発行部数を誇る日刊丁紙をバックに彼はどうして、このような発想で書くのでしょうか。

私のいるタイにもSの指摘する華僑が目立ちます。この国の面積は、日本の国

土の一倍半も有るのに人口は日本の1／3強の五千万人ぐらいだということです。人口の十パーセントもの産業資本とシェアーを独占しているのです。

この国で唯一の大都会バンコクを歩いてみるとそれがよく分かります。小売の商店・食堂に始まって、問屋・しょうしゃな会社のオフィス・デパート・病院・銀行に至るまでみんな中国人の経営によるものです。どの看板を見てもタイ文字と漢字が、並べて書いてあります。

日本の経済侵略企業も、総合商社や銀行を除いて、華僑との合弁資本によるものが、多いのです。

タイに於ける華僑の貪欲なまでの手口は、バンコクだけではなく小さな地方の町に行っても変わりはなく、村に商店が一軒しかないような僻村でも、判で押したように華僑の看板が見つけられます。

貧しい北部や、イイサアン（東北）地方ではこの中国人たちが商売だけではなく悪どい手口で農民たちを収奪しているのです。「看田買い」日本のように企業

が人材を求めて卒業予定者の争奪に明け暮れなどになっているのを指して言うのではありません。現金収入の少ない農民たちは、収穫以前の稲を格安に、その日その日の生活必需品を中国人の商店から掛売で求めるのです。不順な天候などが災いして思うように収穫が得られなかったときはどうなるのでしょう。

幼い少女たちが抵当の肩替りとなってバンコクへ送られてゆくのです。タイの売春防止に関する法律は日本と比較すると格段に厳しくて、懲刑を含む罰則があるのですがタイ人の実力者（官吏）と結託している華僑にとって人身売買などは日常茶飯事のようにしか考えていないようです。

首相のチャチャイが率いる与党の有力国会議員が東北地方の森林乱伐採の後始だったと分かって総理は次期に出馬しないと宣言したりして、事件を曖昧に終わらせてしまうのですが新聞を賑わしたこの種の記事の写真もテーク材を積んだトラックが没収されて傍らにタイ人の運転手が後手に手錠をかけられているのがみられるだけなのです。　人身売買が公然と行われる森林の密伐採・政治の変動も意中の通りになる。それは国の経済を百パーセント近く握っていることにほかならない。中国人のこの拝金主義丁稚のS記者は、どう理解しているのでしょう。

情報としては知っていながら、商業主義のマスコミの一員としてS記者は真実をかけないのでしょうか。

第三世界の自然破壊に心を痛める人にとって実にそれをより積極的に運動化して自然破壊の立場をとる人たちにとって、傲慢な華僑の存在は決して無関心ではいられないと思うのです。

（一九九〇年三月十三日　記）

バンコクより

はにやすのり

サラワク先住民と共に「サラワク材輸入中止」を商社に申入れ

世界一である日本の熱帯木材輸入はマレーシア・ボルネオ島のサバから83%、サラワクから53%で、サラワク州での伐採はリンバン、バラム両川流域に集中。そこにすむ先住民は多大な被害を受けいる。止むなく、生活を守るためのブロケードが八七年三月末より行われた。しかし大量逮捕など人権侵害が続いている。

今回サラワクから来た人々と私達市民グループは、サラワク材輸入商社に申し入れを行った。

「当社は大阪では南洋材の輸入計画をしていません」と逃げ腰のニチメン、「二三人なら話合います」という日商岩井に、三月一四日、二十名程で申し入れ。両社はサラワクから住友林業に次ぐ輸入量である。住友林業は当初、「私達と会う」といいながら、突然拒否してきた。何という会社だ！！

ニチメンは一時間のやりとりの後で仕方なく申入れ文を受け取る。ニチメンを訪れた後、日商岩井へ全員でおしかける。

「当社だけでは輸入中止出来ない。輸入協会に話をしたい」と。「今までもその話はあったが、何ら実行されていないではないか。人権を侵害されていることにショックを受けている、というがどういうことをするのか。」と私達は迫す。サラワクから来たジョクさんが申入れ文を渡して、輸入中止を申入れた。

（一西岡）

サラワク材の輸入即時停止を！

2. NEW BLOCKADES! IN SARAWAK　　（ペナン消費者協会から）3/20

On March 4th 1990, a group of landowners from Long Wat, Sg. Apoh put up a blockade to prevent Interhill Timber Pvt. Ltd. from constructing a logging bridge on their land. Appeals have been sent to the District Officer, Forestry Dept, and the police. An application for an injunction against the company has been filed.

4. UMA BAWANG TRIAL, 26-27 MARCH 1990.*****

This civil suit case will be heard in the High Court in Kuching. A group of Kayans from Uma Bawang of the upper Baram River is contesting for their rights to their customary native land. The outcome of this case will set a precedent for the many other claims to traditional lands by natives, including the Penan. Thus, the case may have significant influence on the land rights of ALL natives in Sarawak generally.

The Kayan action will seek an injunction to stop logging as well as compensation for the damage already caused to their customary land.

マレーシア・サラワクからの木材輸入の即時停止を求める申入れ書

ニチメン株式会社

日商岩井株式会社
代表取締役　宇武章二　殿

過去４０年以上にわたり、日本の商社・木材会社は、フィリピン、インドネシアなどの熱帯原生林の伐採事業に投資を行い、かつ集中豪雨的に木材の大量輸入を行い、東南アジアの森林を一つ一つ食いつぶし、そこに住む人々の暮しをも破壊してきました。そして今日本は、熱帯広葉樹丸太の世界一の消費国としてその輸入量の９割以上をマレーシア・ボルネオ島のサバ、サラワク両州から輸入しています（サバ州から３７％、サラワク州から５３％）。

とりわけ、マレーシア・サラワク州のリンバン川流域とバラム川流域は、最も現在伐採が激しいところで、そこに住むプナン、カヤン、ケラビット族などの先住民は伐採によって大変な被害を被っています。とくに狩猟採取を中心に伝統的な生活をしているプナンの人たちは、食糧をはじめ薬草などその生活基盤や文化を全面的に森に依存しているため、これら森林伐採による影響を最も直接かつ深刻に受けています。そのため、プナンの人たちは、自らの生活と文化を守るため４年前から伐採道路を封鎖するなどの行動を行ってきました。それは再三にわたる彼らの窮状を訴える申し立てを州政府や伐採会社がことごとく無視したため已むなく行われたものといえます。

しかし、こうした先住民の行動に対し、州政府は、却って軍や警察などによる道路封鎖の強制解除、住民の大量逮捕（今まで３００名以上）、彼らの土地に対する慣習法上の権利を無視した森林法の改悪を行うなど、事態は悪化の一途を辿っています。そして現在では食糧の減少による先住民の健康状態の劣化、感染症の増加など深刻な被害が出始めています。

このような先住民の被害については、現地の伐採会社、政府とともに日本の商社等も重大な責任があると私達は考えています。

今、サラワクを訪れているオーストラリアの熱帯林保護団体のスタッフによると、リンバン川上流域などの森は「もう１月あまりで伐採されつくすような状態」とのことです。そうなれば特にプナン族はそれらの森と共にその生命と文化の危機に立たされることになります。

サラワクから大量の丸太などを輸入している貴社はこの事態を何とお考えでしょうか。

私達は貴社に対し、先住民の生命と人権、そして彼らの生活を守るために人道上の見地から、サラワクにおける伐採活動の即時中止と、サラワクからの木材の輸入の即時停止をされるよう申し入れます。

１９９０年３月１４日

大気問題を考える全国市民会議（ＣＡＳＡ）　下垣内　博
ウータン『森と生活を考える会』　西岡良夫
日本環境保護国際交流会（ＪＥＥ）　ジェームス・グリフィス
地球の友　亀井ナオミ
熱帯林行動ネットワーク（ＪＡＴＡＮ）　黒田洋一
［弁護士］　寺田武彦　武村二三夫　西村忠行　林良二　太西裕子
早川光俊　富崎正人　飯高輝

「熱帯林の伐採はやめてんか！」

伐採反対パレード

奥村 知亜子

三月二六日午後、私達のパレードは始まった。思い思いのプラカード、服装に怒りと変革への希求をこめる。拡声器の声、シュプレヒコール、笑い声。驚き、笑いころげる通りがかりの人々に抗議のビラを渡す。

三菱商事、ニチメン、三井物産、住友銀行、住友商事。その整った高層ビルは、誰の汗や苦しみの代償なの。嘘でかためられた日本のくらし、ガラガラという音をさせて崩してやる。

ちょうど同じ日に、サラワク州クチンでも先住民が伐採会社と州政府に対する告発の裁判の開始。

パレードの声は法廷へ、告発の声は私達のもとへと響く。明るい青空の下、力強い笑みを浮かべ、ラリーは続いた。

熱帯林伐採反対訴え

キタでデモ行進

環境保護団体のメンバーら

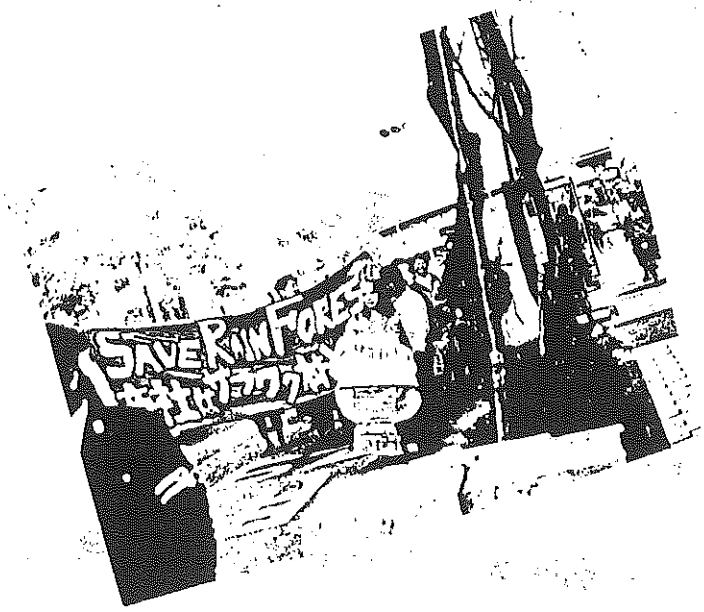
（朝日サンケイ）

深刻化する熱帯林乱伐の実態を知ってもらおうと、環境保護団体のメンバーらが二十六日、大阪市北区で熱帯林伐採反対のデモ行進。南洋材を輸入する商社前ではシュプレヒコールをあげ、輸入の即時中止などを訴えた。

日本の熱帯林輸入量は世界最多で、うち九割をマレーシアから輸入。とくに、マレーシア・サラワク州では乱伐が激しく、森で生活する先住民が伐採に反対して大量逮捕されるなど、問題は深刻化している。

この日のデモ行進には約三十人が参加し、木の枝を体に付けたり、樹木の形をした帽子をかぶるなど環境保護をアピールした姿で屋町公園を出発。淀屋橋までの二・五キロを約五十分間練り歩いた。

デモ行進を企画した環境保護団体「ウータン・森と生活を考える会」は「私達の消費生活を根底から見直し、商社は木材輸入をやめてほしい」と訴えていた。



アジアでの開発と人権抑圧を問うつどいを終えて

中島美成子

去る三月十四日に行なわれた集会は、参加者百五〇名、海外ゲスト四名、国内ゲスト一名、通訳二名という、量、質ともにずっしりのものとなった。主催団体は、ウータンをはじめ、関西共同行動、フィリピンと日本を考える会、マレーシアと来ーマンディ、アジアセンター21、アジアフレンド、シニガポールに自由の翼を、との会、大阪ーNCA若者地球人クラブ、ユニセフ関西市民の集い、フィリピン強制移住・地区支援草の根質問の会、人権市民からアジアの子どもと平和の会の11団体。ウータンとしても この位だけ多くの団体と協力してやった集会は、今回がはじめてである。

会は まず、スライド（サラワク州、レイテ島、伐採地、ARE現場、川鉄プラニテーション）から スタートした。全体的に 大変 時間が足りなくて ゲストの方々にも すりぶん無理を言って縮ってしていただいたりして、会は進行した。

松井やよりさんは、五十分ぐらいの時間の中で、当日前日まで滞在されていたフィリピンの報告、その他アジアの各国において日本がやっている援助と、利潤のすいとり、開発によって住民の生活がおびやかされている例を数多くあげていただいた。たとえば、サラワク州の伐採、ダム建設、インドのナルマダダム問題、フィリピンのカルテ地区の丸紅の工業団地建設問題、その中でも ODAの援助により、女性の労働がどうかわり、マイナスに働いているのかという話はおもしろかった。アジアン・ウーマン・ネットワークがあるそうである。

フィリピンからは、グリセルダ・マョアンゲ弁護士が日本企業の係わるレイテ島バサールの開発と公害輸出は、やめるよう、強く訴えた。

マレーシアからは、タイラン弁護士がサラワク州の先住民が法的にどのように処遇されているか、土地所有の問題を説明して下さり、ウマバワン地区の、ジョグ、ジョウ、イボンさんは先住民の生活がどうおびやかされているのか、日本の生活にメスをいれる 鋭い口調で訴えた。ネパールからも観光によって おびやかされている人々と自然の状況が露出された。残念なことに時間が多くあったにもかかわらず、それにお答していただく時間がとれなかった。いろんな意味で、この会に係わっていただいた方に、感謝の意を 表する。

「アジアでの開発と人権抑圧を問う!つどい」に参加して

北本一郎

熱帯雨林破壊、公害輸出、買春観光、ODA、アグリビジネス…この集会で扱われた問題は多岐にわたった。

それにしても、これだけ日本人、日本企業更には日本国家のアジア地域における悪事をたてつづけに並べられると、本当につくづくこの国に住んでいること、自分も日本人の一員であることが情けなく腹だたしく恥かしくなってくる。

日本の「繁栄」にはとてつもない「裏」がある。「裏」を知ってしまった時、普通の人ならば、もはや無邪気にこの「繁栄」に酔ってばかりはいられないはずだ。日本の「繁栄」のために犠牲を強いられるアジアの貧困者、女性、子ども、少数民族、政治犯などの人々を意図的に無視し、「黙殺」することによってはじめて維持できる「繁栄」や「豊かさ」とは一体何か。

こんなに残酷で非人間的な「仕組み」が平気でまかり通っているのが、現在の日本とアジアの現実だ。

抑圧されているアジアの人々の声は、普通私たちのところには届きにくい。企業が容易に国境を越えてゆく事とは対照的だ。このことは今まで、日本企業のアジアでの横暴を野放しにするひとつの原因となってきた。事実は隠され、被害を受けた人々は「泣き寝入り」というパターンだ。

ところがここ数年、事情は変ってきている。日本のせいで迷惑しているアジアの友人たちが、日本の市民グループの招きで次々と来日し、直接語りかけてくれる機会が多くなってきた。

今回の集会でサラワクの現状を訴えられたJ・J・イボンさん。私も一昨年のプナン族によるバリケード封鎖の報導以来、サラワクの森林破壊にはとても関心があるのだが、正直にいって、私でさえこの間三回も日本で先住民の方々のお話を直接伺うことができたのには、ちょっとびっくりしている。なにしろ、私がはじめてこのことを知り、例えばプナン族について大学の図書館で調べたところ、ほとんど何もわからなかったくらいで、当時私にとってサラワクの先住民は遠方もなく遠い存在に思われたのだ。ところが市民運動の国際的連携などが少しずつ実を結び、こちら側の地球もだんだん狭くなってきた。こんな「国際化」なら大歓迎である。

今回はサラワクからの報告の他、フィリピン・レイテ島の銅精錬工場による環境汚染が女性弁護士G・M・アンダさんによって報告され、とても印象に残った。今年はこれもかなりの注目を集めそうだ。私も、この件に関しても、もっと知りたいし、何か出来ることがあれば積極的にやってみたいと今は思っている。

最後に集会全体を通して、ここでは言及できなかったが松井やよりさんの講演を含めて、決して参加者に絶望感を抱かせるのではなく、希望や行動への意欲を与えてくれるような、とてもよい企画だったと思う。少し時間が短かかったのは残念だったが、とにかくスタッフの皆様御苦労様でした。

ウータン活動スケジュール

4/01(日)「炭焼きと里山のあり方」
〈集合〉午前九時
近鉄・藤井寺駅北側ロータリー
〈実働〉くらしを考える会
〈持ち物〉お弁当

5/19(土)「ウータン祭会」
〈場所〉大阪府立労働会館
＊JR・地下鉄中央線の森の宮駅より徒歩数分
TEL(06)九四三-一〇〇〇

〈基調報告〉
"熱帯林の伐採を"
とう。
〈報告者〉
猪俣栄一氏
(実ループ会社勤務者)
担当

アンケート(無料)ビデオのご案内

●先日、ハワイの国際「Test Site」より、「Sacred Sites」というタイトルのビデオが送られておくられてきました。私自身まだ見ておりませんが、この団体は、いろいろな研究をしていて、その研究成果をまとめたものであるようです。興味のおありの方は、ウータンまでご一報を。

●さてこのハワイのグループは、虎についても生態・保護・状況の研究も行なっているとか。ただまだ情報不足のために、現在、情報保持者募集中。どんな会かもわからず、ただただウータンも発足2年ともなると有名になるもんだと関心——すみません。他団体とのネットワークづくりについても考えてみなければならない時期にきているようです。(ご連絡は西岡氏まで。〇七二-三二-三二〇五)

(編集後記)

今回は、数少ないページ数ゆえに、この場をかりて人事異動のご報告をば——。

会計にはられた川本氏とうど。「えー、この度、女神ウジマから会計をバトンタッチしたテキサスのニコこと川本克明です。紙加工の会社に勤めています。趣味は、野球とボーリングなど。好きな言葉は"愛心"。ウータンに入会した動機は、たまたま他団体で活動していた時に、海外で行なわれている森林伐採は、実は、我々の生活にも、関係があるんちゃうかと聞いたので、少しでも、伐採反対に協力できればと思ったからです。以上」

——会費の皆さまにもう一言。

「年会費千円という、会費増額のためにがんばってきたウータンですが、連合事務所の部屋代月四〇〇〇円には、もうこたえられません。六月から年度がわりと共に、値上げ(検討中)に何とぞ、深いご理解をあがりますようお願いいたします。」